

あれへたえてはらはむ術無がな。』

一。

おほい人へもさへあざやかに、おとこはるかに、おとこはるかに、『微、突、星、一つ。』

西山陰に沈む日の刻、入道の音が、はるかに響き消えよ光の甲斐なさに。』

鏡の里に消ゆそみて、鏡に見ゆる夢を、はるかに思ひて、『暗黒に入ゆく夕日影。』

月江上の秋の黄昏、

本元の世の末の姿あり。『おもむろに、おもむろに、我世すずしと照らしつゝ、我
我の陰府の面影、舞の身の姿も、おもむろに、彼方に遠へ浪の音、
我恐れ亂處思ひめ。』おもむろに、舞の姿も、おもむろに、唯淨界のにはひあり。
閣路の露にそばちつゝ、

忽ち起る風いたみ、

寂し鄭獨り逍遙ひつゝる、其處の空と、夜の雲は愁ひて光消え、
寂れ心移し、空を眺むれば、はるかに、白波いたく吼えくるひ、
神の慈愛のまなざみが、舞の風、浪打田水、現ゆぬ翼に、黑暗飛びて、
遙か證みそむ大空に、霞に、はるかに、風が、恨は長し雲の上。』

おとこはるかに、おとこはるかに、『おとこはるかに、おとこはるかに、』
鏡の里に、おとこはるかに、『おとこはるかに、おとこはるかに、』
紅葉の下、行く水も、あやに、おき心して、おせ繪津の河舟

あやにしきさくらす河土のもみぢ葉はちりても浪にしきたて花
山井のあさき流に秋の色の深くもにはふきしの紅葉 江 鐵 陽 紗

はてはまたいつこの瀬にかにほふらむ散りて流るゝ峯の紅葉
夕日影にはへる水にもみぢ葉の波のあやれる玖磨の川面
影うつる鏡か淵の薄紅葉水にも秋の色は見えけり 基
行舟の影もかくるゝ川霧の絶間に匂ふ櫨の木と蘆 寄
白川の岸のもみぢ葉秋おいぬ水紅に今はそめけり
白川の波のうねうね色どるは風のたくめる紅葉なるらん

雁聲稀(空)

を山田のおくてのいねもあるものを今はまれなりこしの雁金 桃 江
此ころは雁の羽風の音たへて草の枯葉を名残とぞさくよ寄りて 蘆
世をうしと雲にや雁も入にけむ沼田をわたる聲たにもなまく
れどつるひ雁さへまれになりにけり何處か秋の初めなるらむ 鉄 州
月

村家菊(即題)

菊の花八重九重にさく頃はひなも都もへたてさりけり 稚堂先生
賤かやくねくれてにはふ菊の香のふかきや花の心なるらむ 峯
訪ふ人のありやなぞやとぞら菊の淋ゑく立る賤の庵哉
なかく水露に色香の深きかなぞつか垣根の白菊の花 桃 江

かむ此てそ家つ邊に置く残か屋の垣根北邊附る菊の一本
賤かやのまかきの菊の花もたゞ今日の盛をそへんとや唉く
玄のかなめ浮世の外の賤家をひだりしめたる菊の花かな
えつかやの垣根の菊もかをるなり君か惠の露のあまねく
付ねかて誰れか見はば玄つか家の垣根を向ふ白菊の花
人遠き庭に匂へる白菊やこの世の外の色は見えたる
麿男かすつるかき敵のちひひ鳥を色にかくせり白菊の花

郭外冬眺(全)

託麻野のむらすみき場もかれて日影さひしき冬はきにけ
飛鳥のねぐらにかゑる音鶯なむて眺さひ玄の夕くれ
たゞに守るか焉玄の外に人もな玄山家も今や冬は知るらひ
霜かれし杜の梢冰日暮落て鳥の音感ひ玄託麻野の原
吹きすばみ諷に散行く木暮の葉の軒端にふかき冬の夕くれ
木枯の風に草木もかれはてゝ人めまれなる冬の夕くれ
木枯の吹きゆのらを來て見ればなへてふするの床とこを見れ

榮

孝

鐵

基

寄

蘆

月

熊

紀

洲

州

月

紀

村

桃

江

月

紀

州

月

基

破

孝

鐵

基